The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	酒井君を偲びて
Author(s)	中川, 幸三
Citation	懐徳. 1977, 47, p. 45-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90553
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

酒井君を偲びて

中川幸三

六月六日朝、酒井君の逝去を知って愕然とした。昨夜元気な電話の声で話し合った計りなので、全く夢歟と暫くは茫然としていた。その死を確めて急に言い知れぬ心の寂しさがこみ上げて来た。

君は、明治二十四年十二月十日、岡山県後月郡明治村花滝に生れた。高等小学校卒業後、一時僧たらんとして寺に入ったが、志を変へて、大阪に出で、繊維問屋の徒弟となり転じて本町の織物問屋伊藤新株式会社に勤めた。終戦後同社解散により、独力で損害保険代理店を経営されて今日に及んでいた。

大正の初め頃、重建懐徳堂の開講以来聴講生となり、爾来六十余年、寔に一日の如く、その熱心なことは山本楢信君と共に双璧というべきであった。殊に昭和初期から、堂友会の会務を鞅掌して倦むことなく、大小の企画雑役に精根を尽くして死の直前まで渝ることのなかったことは、誰も真似の出来ないことであって、一同感謝の的である。

家庭にあっては、三男三女の子福長者で、夫れ〴〵婚嫁を卒えて、育英界に、刀圭界に、実業界に立派に活躍され、孫さんも十数人という繁昌振りで、来年は米寿の賀を自祝すると楽んでいられた。それは若い時代の御苦労が良い実を結んで、福徳寿兼ね備わったとても羨しい境涯であった。

家に在っては、中々厳格な父であり、お祖父様であったということである。然し君は、生来寡言ではあったが、率直の中に、独特の愛嬌と温か味の滲む言動があって、他家の幼孩が懐く程であった。

身を持すること倹素、廉直を重んじた。我が善を揚げず、人の悪は口にしない。敢えて人に逆うことはしないが、自信は強く、決して枉げることはせぬ。実行力は強く、克く窮乏に堪え、重き荷物を負うて遠く坂路を行く気概に溢れている。これでこそ、艱難の世に処して、多

子を薫陶され、独往の境涯を築かれたもので、永年親炙する我等にも無言の示導を与え呉れられたこと甚大なものである。

君は日常の飲食には、決して好悪は言わない。唯酒は大好物で、和洋は問われなかった。しかし、量を過しても乱れるという酔振は見たことはない。

趣味は広い。大体文芸の方面で、古美術の観賞のため古社寺巡り、博物館その他、展示会の観覧にはよく暇をさいて出掛けられた。平安彫刻国宝展覧会を観るため、上野の国立博物館まで、わざ〳〵上京したこともあった。又、独り稽古らしいが書道や俳画もやったと見え、遺作が沢山あった。これは家人にも知られず、歿後、私が遺書整理中見出したので、何時やっていたのか。恐らく夜中でもコツコツ彩管を揮っていられたのか。書道の方は条幅が一枚あったが、画の方は仲々器用に描けていた。

古くから俳句はやっていて、堂友会誌にも載せられたが「不如」はその俳号である。

漢詩は、昭和初期から呉山社同人となり、中井黄裳、岡山源六、吉田北山、諸先生の指導でやり出した。字完叔。号鳴谷とはこの頃からの、称呼で「完叔」には北山先生の字説がある。

書藉の蒐集も大きな道楽で、暇と足とで根気よく蒐められた。これには私もよくお供したもので。所謂金持の蒐集とは聊かその選を異にする、同臭の二人であった。「酒と書藉の堆積裡で暮したい念願だ」と平素口癖にしていたと言う。これは未亡人の話である。

就中、太閤記に関しては、古版本、古写本から現代人の作品までも、書架、数架に満つる程で、私も岩波文庫本の太閤記二冊徴発された覚えがある。

君は、白話文がよく読めるので、中国小説類も相当あり、漢詩は唐本、和刻と点数は多い。多趣味なのでその蒐集範囲は汎く、居住に不自由を感ずる程の儲蔵は、先づ盛矣と謂うべきである。

旅行も好きで、普通の観光旅行にも、随分方々廻っているが、信仰の故が、四国遍路は繰りかえし数回巡歴して、満願の納経印の数軸もあった。これには私も、よく勧められたが、遂にお伴する機はなかった。

旅には移植鏝は忘れない。連れに逸れても、悠々、根を掘っている君の姿は人の馴染む所だ。それが今繁って家の庭先から門前を緑に埋めている。

相撲も好きで単なるテレビ観賞に甘んじない、大阪場所には時々出掛けていた。大鵬の大ファンで相撲雑誌も揃えていた。

往年の京都大学の先生方の遺墨も、相当蒐められてあ

り、今度私は懐しく拝見した。

曾て、こんな話もあった。山本君と二人で京都の狩野先生の揮毫を請うたが一寸、諾われそうになかった。そこで両人は考えて「天照皇太神」と揮毫を懇願して、やっと望が叶へられた。然し、唯だ、五字一行の書で、それには落欵がない。先生が「落欵は神位に対して畏れ多いので」と仰せられたというので聊が憾んでいた。その書は誠に立派なもので、今、酒井家の宝物になっている。

こんな時代の懐徳堂の講義がすんで、帰りは九時半になる。冬の寒い町の通を家路に向う途、時には松屋町、内本町角に「五郎八」という酒肆の縄暖簾をくぐって一杯呷る酒井山本両君がある。その時外で待つのが私で。こんな風景は時折り、想い起すが、今、君の死によって、俄かにあり〳〵眼にうつる。

此三人、夫れ〴〵個性は強く、お互い妥協性はない。それが堂のことになると、不思議に固く繋って来ている。

山本君は、船場の綿布問屋の御曹子。酒井君と私とは、言わば徒弟出身だが。御曹子は最後の一点、中々牙籌を忘れない。酒井君等は分限を善く守っているようで、終には何もかも忘れて趣味に流されてしまう。叢書を購うにしても、片や首巻と末巻とを買うに止める。片や有りもせぬ嚢中を傾けて、揃えて架上を飾る。積読(ツンドク)であることは何れも同じことと、悟ったようなことを語り合い、哄笑一番した三人男の中、山本君が、昨年、先づ逝き、今年酒井君亦歿り、斯くて、明治人は、漸く凋落して行く。人の世の常とはいへ流石に淋しい。

曾て何かの拍子に珍らしくも当人から承った話だが、少年時代、郡長から、学業成績優良で表彰されたことがあるという。その郷黨の秀才は、長じて大阪実業人となり、往年大阪朝日新聞にその異彩振りを再度掲載され、大に気を吐いたことは、知る人は存外尠い。この偉大なる教養人、酒井鳴谷翁に就いて偲び出づる儘、書き記して、その冥福を祈念いたしました。

九月六日